

越境作家ザビーネ・ショルの掌編翻訳・解題

Die transnationale Schriftstellerin Sabine Scholl

解題：土屋勝彦、翻訳：竹内宏

Übersetzung von Hiroshi Takeuchi

mit Anmerkungen von Masahiko Tsuchiya

オーストリア人女性作家のザビーネ・ショル(1959年生まれ)は、ドイツ語圏の「越境作家」のひとりとして認められている。この場合の越境作家とは、母語以外の言語で書くことによって母語の歴史文化的伝統の上に築かれた「国民文学」の規範から逃れる作家という意味ではなく、母語の日常的使用から引き離された経験から母語を相対化し異化するような経験を持つ作家、あるいは「国民文学」に属しえない越境文化的な経験と視点を有する作家という意味である。28歳から2年間のポルトガル・リスボン滞在や、36歳からの4年間のシカゴ滞在と1年間のニューヨーク滞在などを含め、ウィーンやベルリンを居住の中心に据えながらも、さまざまな国々を渡り歩き活動してきた経歴からも推察できるように、文化的越境者を自認するショルは、移民文学や亡命者文学あるいはマイノリティ文学など越境的な文学者への強い関心を持ち続け、インターカルチュラルないしトランスカルチュラルな諸経験を深化させ、モノカルチャーとしての静態的、均質的な文化概念を壊すことによって、あるいはモノカルチャーに内在する多様な異文化混成状況に向き合うことによって、オーストリアやドイツという国民文学の伝統や桎梏から逃れたコスモポリタンな地平を開示してきた。たとえば、小説『マリナの秘密の手記』(ベルリン出版社2000年)は、南米の植民地主義の歴史とシカゴの多文化主義的状况を跡付けながら、そのモンタージュ的な手法や変転する複眼的視点により現代のポストモダン文学を体現する作品となっている。そして、こうした複数文化の媒介者としての関心のあり方を典型的に示す例を以下の三つのエッセイ・掌編に確認することができる。まずそれぞれのテキストの主題と構成について若干の解説を加えたあと、翻訳によりショルの越境的な志向の一端を紹介することにしたい。なお、本テーマと深く関連する資料として、2004年初頭に本学で行われたショルとのインタビューがあり、本紀要の前号(第17号235-248頁)に掲載されている。

エッセイ「ウィーン、リスボン、シカゴ、ニューヨーク、そしてベルリン」(2004年講演会での発表)は、ショルの異種混合主義的な立場を率直に語るテキストであり、よそ者としての自己意識が文学的想像力を刺激するという。そしてアメリカ合衆国における「垣塙」神話を批判し、溶け合わぬ異文化の衝突から生まれるハイブリットな文化変容を擁護している。たとえばヨーロッパのカトリシズムがメキシコのアイコン文化に流入し溶解・変容していくあり方を自己の文学活

動の源泉として再発見する。さらに異文化を認め合い、衝突・交流しながら、それぞれのアイデンティティを破壊することなく、相互変容し、共存的な「統合」に向かう歴史文化的な越境的位相を諸都市での異文化経験から探ろうとしている。

次の掌編「ヨーロッパがのぞかせる顔」(1998年ザルツブルクの朗読会での発表)は、場所と言葉、身体と色彩の移ろいと変容の認識と、それに対応するアイデンティティの揺らぎを扱った短編テキストである。冒頭から映像的な光の変化に始まり、ネオンサインの光、文字の消えた店の看板、暗い家の窓、窓からせり出す身体と音楽、直接的な聴覚受容、都会の孤立感、寂寥、無音という個々の言葉の連鎖が、場所と身体性と色彩のイメージ連想・交錯を生み出している。メキシカン街シカゴの風景は、青、赤、緑といった色彩感覚(雑居的視覚)から、呼び声、口笛といった雑駁な聴覚へ、さらに文字(視覚)の消去、不法滞在者の消失から暗黒の窓へと収斂し、ウィーンの風景に変わると、寂寥感から逃れようとする移民たちの躍動的な音楽とリズムが、窓から直接語り手の聴覚に入り込み身体に侵入する。さらに次のベルリンの風景では、高層ビルから見下ろす人間の矮小さ、都会の夜の寂寥感、窓明かりと無音の世界へと収束していく。雑踏的な色彩と音響の流れが、移民たちの自己証明を誇示する符牒となって立ちあらわれ、最後に都会の寂寥に飲み込まれ消えていくというプロセスがみてとれる。次にこうしたプロセスの具象化がさらに展開されていく。無法の都市シカゴから管理と統制の行き届いた都市フランクフルトへ語り手は到着する。ここからドイツ語という言葉への親近性を感じながら、外国人排斥や管理と統制の支配する国ドイツを再認識する。次の場面はまたシカゴの下町に変わり、語り手は物騒な通りを歩きながら、疎外された自己証明を執筆に求める。シカゴの11月、ハロウィンの季節を語りつつ、仮装して外出する語り手は自分のアイデンティティを揺さぶられる。「無の中から巨大なものをつくり出すこと」が得意だという述懐は、作家活動を暗示する。場所と記憶の関係についての省察から、ポルトガルでの記憶をたどり、「熱い欲望」という希望と「よそ者であることの恥辱」という絶望、希望を持たぬことの無欲の報酬について語る。さらにまたシカゴの場面となり、メキシコ人社会における白人のよそ者としての自己意識、外国語と母語の交錯・衝突・ずれの認識、アイデンティティのすり替えと日常への帰還が語られる。慣れ親しんだものへの憧憬と現実の裏切りという乖離の感情が、アイデンティティの多様化を促し、ペルソナを装う自己像を生み出していく。テキストは、視覚的な映像表現から、音響へ、さらに味覚表現へと統覚的な退行感覚の流れを示すが、これは過去の追憶という退行的自己像と、記憶を物語に変容することで現実を認識する作家のヴァーチャル的な自己像を同時に提示している。

エッセイ「亡命—『苦悩』のみが残り、『故郷』ははるか」は、『マンハッタン憧憬—ニューヨーク文学探索』(パトモス出版2004年)に掲載されたエッセイ集のなかの一章である。この本は、ポーやメルヴィル、ウィットマン、ドロシー・パーカー、トニ・モリソン、ボールドウィン、オースターなどニューヨークの街と関わった作家たちの足跡を訪ねながら、文学的磁場としての

多様なニューヨークの相貌を浮かび上がらせ、さらに亡命作家たちや移民作家たちの生きた時代と現在の活動状況を詳細に描き出したエッセイ集である。とりわけユダヤ系亡命作家たちやスペイン・ハーレムに暮らすラティーノ作家たちに向けられる眼差しは、ショル自身の越境性と異文化接触への熱い想いが反映している。多士済々のユダヤ系ドイツ人亡命作家たちの生活状況を追いながら、異郷の地において異なる文化と言語の狭間に揺さぶられ、絶望と希望、疎外と同化、挫折と成功、ノスタルジーと嫌悪、コミュニケーションへの自己閉鎖と離脱・自己解放、ユダヤ的伝統回帰と世界市民への自覚など、両極に振り動かされていった同胞作家たちの実態を活写している。なお、最後に登場するルート・クリューガーの作品『生きつづける』は、1997年みすず書房から鈴木仁子氏によって翻訳されている。以下の翻訳は竹内宏によるものである。(土屋)

ウィーン、リスボン、シカゴ、ニューヨークそしてベルリン

(住む) 場所が私たちの(心の)あり方を変えるかどうかと尋ねられたら私は次のように答えるでしょう。どの土地に行っても違う種類の抵抗感が生じるのです、と。例えば私が、壁の崩壊後にポルトガルからベルリンに帰って来たときに違和感を感じ苛立ったのは、西側「世界」の鈍感さ、つまりは陶酔的な幸福感が支配し議論が行なわれてはいるものの、西側が「オッシー(壁崩壊後用いられる旧東ドイツの人々の蔑称：訳者)」を軽蔑し表面的にしか注目していないということでした。仮定の話(もし〜だったらどうだろうか)が今や現実になったのです。硬く固まっていたものが動き出したのに、人々は根本のところまでそれまでと同じようにやっていこうとしたのです。懷疑を抱いたままのウィーンはこれらの問題を直接的にはまだ知りませんでした、もっとも、ウィーンは今ではすでに、東西間の「リオグランデ」と呼ばれることがあります。ここ(ウィーン)では私は後に、偶然窓の外を覗くときには何度も繰り返し出会わないではいられない、向かいの家からの難民?、外来客?、労働者?の毎日の視線を煩わしく思うことになります。この視線は私のお向かいさんになったのですが、それは私が選んだものではないのです。彼がなぜいつも私の部屋の中を覗きこもうとするのかを私が理解しようとしても、それは、「私には誰とどこで出会うのかを選択する権利があるはずだ!」とささやきかける感情を抑える助けになるわけではありません。ウィーンは—そしてそのようなとき私はウィーンそのもののなのですが—すでに、見知らぬもの(異分子)に対して扉を閉ざしてしまったのです。ここで私たちは、人間は半分でも自分を確立するために、他人とそして境界をどれほど必要とするのかということを思い出しました。それは私が育った田舎の村で始まっていたことなのです。そこでは人々は、他にどうしようもないときには、差異を作り出すためにほとんど目に見えないものを持ち出すものでした。悪口を言う楽しみ! 誰かの悪口を言うことは、その人を隔離し、その離れたところから眺め、「私たち」の仲間ではない人間として押し退けることなのです。そのためのパラメーター(決定的要素)は何でもいいのです。こういうことが至るところで起きていると、私は知っています。

理由づけだけがその都度、歴史的及び文化的特色に規定されて、異なるのです。

自分がよそ者だと感じた経験を持つ人、あるいはよそ者扱いされた経験を持つ人は、常に自分にしがみついている人よりも、異なるものを良く感じとることができます。私が疎外や異化に興味を持ったのは、外国で繰り返し外国人の立場を経験して以後のことだけではありません。

人生の経歴のこういった折れ目からは創造的なエネルギーを汲み出すことができます。それによって、いつも「自分自身」だけにしがみついていたときにはほとんど明らかにならない、社会的、政治的、階層的、文化的そして言語的に与えられた条件が明らかになるのです。けれどもこれはまた混乱の原因にもなりえます。なぜなら、橋渡しをすることのできない違いもかなりあり、矛盾の多くは塊のまま残り、不快で煩わしいものだからです。

このことについてヴィレム・フルッサー (Vilem Flusser アメリカの社会学者) は移民に関する自著の中で次のように言っています。「習慣という毛布を剥がしてみれば何かが見えてくる。そのときすべてが異常で奇怪な、ことばの真の意味で〔ぎょっとさせる *ent-setzlich*〕 (*entsetzlich* とは本来、途方もないところに移す、の意：訳者) ものになるのだ」。

ことばを用いての仕事は、混乱の中でなお、経験したものを整理し、文学という形でより高いレベルに持って行く最善の試みなのです。

私の関心を引く芸術に関わる事象は結局のところすべて、一見すると相容れないものの橋渡しをし宥和させることに関わっているという考え、それは様々な現象の間の亀裂や破れ目の中から緊張を引き出す異種交配物を扱う仕事であるという考えが私に浮かんだのは、ハンブルク在住の女性作家多和田葉子と彼女の執筆手法について話したときでした。自分のパソコンを用いて彼女は、自分の母国語とドイツ語との間、つまり日本語の絵文字 (表意文字) とヨーロッパの抽象的な表音文字を何度も往復するのです。そしてこの絶え間のない異化の中で信憑性は妨げられてしまいます。そこから生まれるものはどこか、なにかしら中間的なものでありながら、破綻することはありません。しかし今、いくつもの文化が一緒になるなるならば、それはどのようなことになるでしょう。境界を区切ることは避けられません。それはいつでも目にすることができるのです。例えばシカゴです。異分子への不安はここではヨーロッパとは違う形で現われます。ドイツあるいはフランスやイギリスでも、異分子の同化を目標に厳しい努力が続けられています。二つの文化のはざまに第三のレベルを作り出す余地はほとんどありません。白人によって歴史の経過の中で引き起こされた、原住民、アフリカから拉致された黒人、征服者そして移民から生まれた複雑な異種交配 (混血) が存在するアメリカ大陸諸国においては、境界区分はヨーロッパのように可能ではありません。単純化して言えば、隔離というのは否定されます。

私がウィーンで手をつけたことが、私のシカゴ滞在によって偶然に続行されることになりました。その際私の関心を取りわけ、アメリカ合衆国とメキシコとのあいだの軋轢に満ち問題の多い境界文化に向けたのです。この関係が軋轢に満ち問題が多いのはとりわけ、いわゆる第一世界—アメリカ合衆国をそもそもここに加えることができるとしてですが—の中の第三世界の存在を指し示しているからです。その植民時代以前の歴史の文化的ルーツを求めてゆくと、メキシコ系ないしはラテン系マイノリティにおいては、古い神話、例えばアメリカ=インディアン神話を再検証することがいや増しに必要なのです。これらの神話は現代の文脈で再活性化され一種の文化的リサイクリングによってアイデンティティの発見に貢献することになるでしょう。たびたび引き合いに出される「坩堝/メルティングポット」は拒否されます。違いは溶け合わされようとはしません。正反対の性質の混合、もっとはっきり言えば、混合主義が、アウトサイダー及びマイノリティに周辺現象と解釈されてきた彼らの伝統を保持することを可能にするのです。

現在私が住んでいる町であるベルリンでは、すべての家々が同じ高さで、一緒になって空との境界を築いています。路上、そして地下鉄でドイツ語が私の耳に入ります。まれにロシア語、ポーランド語、クロアチア語が、時々トルコ語、アラビア語が聞こえます。

シカゴがどのくらい恋しいかい、と夢の中である友人が私に尋ねました。「シカゴはどうだい」と「そこが恋しいかい」との混合が移行状態を物語っています。私は完全にそこにいるわけでもないし、完全にそこから離れたわけでもありません。

シカゴで私は、第一世界と第三世界との重なり合いの中で感じた初期の違和感の後、私の生活をあらためて組み立て直すことができていました。私のヨーロッパ的部分はポーランドの惣菜店の臭いと味の中に相応しい対象を見出し、オーストリアにしるポルトガルにしるカトリックの国々の刻印を受けた私の美的感覚は、メキシコのアイコン（聖画像）の大衆性と情念に自らの姿を認めることができました。私が教えていたポルトガルの大学の、河口に位置し霧に湿ったキャンパスには、ミシガン湖畔の地形がほぼ対応していました。

ニューヨークの速いテンポの生活でそのあと私は、いわゆる民族的多様性を目の当たりにしてしばしば懐疑の念も浮かびました。というのも、地下鉄の通路である場所ではアンデス生まれのインディオ音楽を聞き、次の場所ではチェコ人のハーモニカ奏者を、さらにその次の場所では、ジャズの大御所「Take 5」の曲を何とか音にしようとするスティールドラム奏者を聞くということは、何を意味するのだろうかと思うからです。

しかしながら、様々な文化の共生の中に違いを認めるのかそれとも共通性を見出すのかは、その人が決めることなのです。共通性は、最低限の同等性が生み出されて初めて目に見えるものになるのです。そしてもしかしたらこのことが、黒人作家のジェイムズ・ボールドウィンがそのヨ

ヨーロッパ滞在のあと明言している通り、なぜヨーロッパは解決策一つ分だけアメリカに先んじることはなく、問題一つ分アメリカに遅れをとっているのか、その理由なのかもしれません。そして、世界のより貧しい地域から西側世界へとおし寄せる移民の統合の必要性がますます緊急のものになっているという彼の見解は、アメリカにもヨーロッパにも同じように当てはまるのです。「西側世界が、つまりは西側世界の人間のことだが、これを達成できなければ、私たちにはもはや未来はない。なぜならば、今や何世紀もの暗黒と抑圧の時代の中から外に出てくる人々は、二度とそこに戻ろうなどという意志は持たないからである」。

ヨーロッパがのぞかせる顔

ビニールシートの後ろでは夜になると青みがかった光が点る、光のしみが、位置をずらしながら、再び立ち上がり、間隔のパターンを変え、映す影も変化する。

下の歩道で誰かが叫び声を上げるとき、男たちはシートをはねのける、上の方の風雨にさらされた赤い色の店看板には、「THE LE DER STORE」、A が消えてしまっている。ガラスの入っていない窓の上方には緑色の飾り模様。

暖かなうちは、季節労働者であるわがメキシコ人の隣人たちが毎日姿を見せる、そして彼らも、私が玄関ドアを開けて出ると、私を見て口笛を吹く。11月中旬の初霜とともに、不法滞在者たちは姿を消す。南に帰るのだ。荒れ果てた家の窓はみな暗いままだ。A が欠けている、相変わらず。

ウィーンでは向いの家の難民たちが窓にガラスは入れたものの、彼らは寂しさのあまり窓を引き開け、窓の穴から上体を乗り出してボリュームを上げた音楽に合わせて身体を揺する。彼らはテーブルに上体をもたせかけた私を、横にずれたその顔を見た、そして彼らのリズムと歌声が遮るものもなく私の耳に突き刺さる。

バルカンの地はほんの数メートル目をやった通りの向うまでの距離しかない。

一方ベルリンでは、隣人たちは私の鉛筆の先端くらいの大きさでしかない、時には両方の腕がだらりと、手が、煙草を持って喫っている。待降節のカレンダーが彼らの家だった、夜が近づくと灯りが点滅する。接触は何もない、ことばも、何の音も聞こえない。

シカゴからやって来て、私はフランクフルトに着陸する、ことばが急にこれほど近く感じる、一語一語がはっきりと、そして路面電車の停留所では（パトカーの）青色警告灯が軌道を横切り、二人の警官が獲物を誇る、アラブ系の顔、その男はゆっくり歩く、身体をまっすぐ立てて、警官は不安を見せる、まるで全く抵抗しない男を逃がしてしまうことがあるかのように。男は煙草に火をつける、待つ覚悟をして。辺り一面を見ても男の犯罪の痕跡は見えない、被害者もいなければ、目撃者もない。それから人員増強、警察だ、今や5人になった、動かない外国人を見張る

ため。

それから栄養も服装も良い人たちの世界に飛び込む、ブレイツェルスタンドとコーヒーショップ、肉屋が並ぶ世界、番号別に重量を測り、若いトルコ人がブドウを安売りするフルーツスタンドの世界、自然食品の店、不安や便秘、インポテンツの治療薬を備えた薬局のある世界へ。

私は掘り進むように歩く、並木道沿いに、丹念に刈り込まれ手入れされていて、行きたいところに私を運んでくれる市電のように機能する。

私は外へと押し進み、青色警告灯が平らな歩道を照らす、穴もなく、ゴミも落ちていない、しかし老女が一人横たわっている、路上に、パーマをかけ、うす茶色の上着、青いトレパン、ただ身じろぎもしない。

はねられたんだ、と、その前に二列で立っている野次馬たちが言う。私は先に進み、磁気テープのついたカードを機械に通すと突然女たちに取り囲まれる、女たちはピン・ストライプやツープース、できるだけ体にぴったりしたものを着て、舗装した広場を急いで横切って行く、そこには巨大な本が、ひょっとしたら箱かも知れないが、落ちて来た。その片隅は落ち窪み、私はそこへと進んで行く。

私が疲れたときは、モード雑誌で興味を持って眺める洋服を着ているようだ。決してそんな服は着ないだろう、それはわかっているのだが、それでもその瞬間は、それを着ていると思い込むのだ、そして私の目は輪郭をなぞり、色を思い浮かべ、スタイルを当てはめてみる、最後には決して自分のものではない髪型や表情まで。それでもやはり私はそれを身につけているのだ、誓ってもいい、そして全く同じように私はシカゴの傷んだ歩道を歩く、深い割れ目は迂回し、たつぷりと散らばる割れた瓶のかけらを飛び越え、「白人女、白人女」と囁いているフードをかぶったメキシコ人の顔を避け、扉に鍵のかかったバーを通り過ぎ、南西部風カウボーイブーツや夕日をプリントしたフリンジのシャツを満載した商店、ギャングとドラッグ禁止の立て看板を通り過ぎ、二週間前に発砲沙汰があった木の屋根のファーストフード店を通り過ぎる、死者が一人出た、そして私は郵便局のところまで辿り着いた、その両開きドアが開く、自動で、そして私は他の人に続いて中に入る。誓ってもいいが、この区間をおよそ10分で歩いて来たのは私自身なのだ。しかし、私の言うことを信じ、それを私のために証明してくれる者は、どこにいるのだ。全く同じように私はウィーンにも、あるいは考えの中にもいることができる。事実なのは、私の身体がものを書いているということだ、だが何を。

私たちは仮装する必要などない、現実是十分におぞましい。怪物になるために仮面が必要ということもない、と新聞に書いてある。そして鳥たち、木の葉が水に向かって落ち、湖は波となって岸边に打ち寄せ、冷たい風がなめらかな水面を掻き立てる、光だけが暖かさを与え、水辺をく

つきりと際立たせ、最後には太陽が家々の間に姿を見せ、次々と現われる影たちを寒さの中に置き去りにする、11月で、私の新聞からハロウィン用品のカatalogが落ちる。しわだらけの手の形をして血の色の雫を滴らせた蠟燭、傷に貼るテープ、銃創、ナイフによる傷跡、空気を入れて膨らませる蝙蝠の羽根、フランケンシュタイン用のメイクセット、お化けのマスクが入ったゴミ袋、蛍光色の骸骨、蜘蛛の指輪、99セントの値段がついた髑髏の形のボールペン。私はその世界に飛び込む、十本の指につけ爪をつけ、頭にはカツラをつけたところを思い描いてみるが、それは私の姿を際立たせ引きさらう、私は幽霊どもを追い払うためにこのアイデンティティのゲームで自分を際立たせる、奴らは新しいものの妨げになるのだ。変身のあと私は再び仕事に取りかかる、家から出て、麦わら玉、それから前庭やベンチに置かれたカボチャの塊と調子を合わせる。ここシカゴでは、死体は埋葬する代りに家の前に置く。彼らがその場所を占めている間、だんだん寒くなっていき、すでに私の足の指は凍えている、そしてその後クリスマスが近づき、商店が、鹿が、樅の木が、トナカイが、櫓が、天使が今や家々の前に並び立つ、その間骸骨は休んでいる、来年になって、面白半分に甦るまで。

無の中から、巨大なものを考え出すこと、この点では私は前からずっと優れていた。人々は目の前に白いプラスチックのコップを差し出している、蓋をつけて、どっちを向いてもその印象をぬぐい去ることはできない、こうすれば彼らの内側がこぼれ出すことはない。さてここで、この土地の散漫さについて、私の考えをまとめようか。私が知りたいのは、どうして記憶がある場所に来ると口を開け、さまざまなものに自分を縛り付けるのか、また別の場所では金輪際開かれることはないのか、後からやって来るものに対して、ということだ。私はどのようにあの町を思い出せばいいだろう、私が住んでいたポルトガルのわが町を、それは今では違う姿で存在しているというのに。私が歩いた通りは、今日ではもう通りではなくなっている、私が買い物をした商店は廃業していた、ボートは新しいものに替り、私の家は広場でいちばん高い建物ではなくなっているというのに。現実を手中にしているのは誰なのだ。出て行った者か、それとも残った者か。

そして、再びリスボンに降り立ってみると突然記憶が開ける。「田舎の」とか「のんびりした」、「美しい」といったことばが再び意味を持つ。それらは単なる決り文句に成り果てていた、どうということもない会話の中で。しかし突然、それらは物凄いスピードで満たされる。耳なれないことばの端々が、ためらいがちに、しかし必要なものとして、やって来る。この町ではまだ、見るということが行なわれる、「凝視 Starren」とシカゴでなら言うだろう、ウィーンなら「見つめる Glotzen」だ。

閉まっている窓口の前で立ち尽くす、中では係員がコーヒーを飲み煙草をすいながら談笑している。私がここで暮らしていたころも全く同じだった、そして今も全く変わらない。そして、私に数々の華やかな瞬間や光あふれる時、熱い欲望の記憶を語ってくれた思い出が、その前に起こっ

たことを再び覆い隠した。それは、よそ者であることの恥辱、意味のない待ち時間と無駄な努力だ。何も望んではいけないのだ、望まないときだけ、何かが起きることが可能になる。私はこのメッセージを飲み込み、腰を下ろす。一時間後、彼らは窓口を開ける。ようやく私は到着したのだ、ここに。

私がシカゴでいつもの通りを歩くと、白人には出会わない。私は例外だ。黒人の買い物客と店員、褐色のメキシコ女性、髪は長く、白いアノラックを着ている、ブーツを履いた年配のラテン系男性、ウェスタンハットをかぶっている、時折、藤色に染めてパーマをかけたポーランドの女たち。彼女らは少なくなった。私がバスに、地下鉄に乗る時、それが私の人種の場所ではあり得ないことを知っている。公共交通機関を使う者は敗北者に違いない、と、他の乗客たちの頭の中の入念に仕分けするカースト制度が考える。白人なら車くらいは買えるはずだ。

私は座席のいちばん手前の隅に立つ、そこはアングロサクソン系のためのものだ。黒人やメキシコ人のための場所からは相変わらず遠く離れている。ラテン系とスペイン語を話そうとしても、彼らはほとんど信用せず、英語で答える、なぜなら私の容貌は、ここのスペイン語を話す人間が持っているはずの容貌とは違うからだ。アングロサクソン系はスペイン語を話さない、アングロサクソン系のスペイン語は大学の教室用かヨーロッパや南米への旅行用だ。路上用、自国用ではない。

そしてそのときことばは傾き、私は目の前にあるものを変える可能性（の小ささ）に愕然とする、自分自身の中から記憶を紡ぎだし、それを物語に包んで目の前に据えている自分の姿を見つめている。そして一方のことばにまだ住んでいるというのに、もう一方のことばが横から私の中に押し入って来る、ドイツ語は掘り崩され、語り出しのことばは英語で出て来るが、二三の単語が出てこないとすぐにまた押し戻されてしまう。あるいは、思考が表面を滑って行く、ひとりだけで、ことばが考えるよう命じるままに。私は何も手を加えず、「suffer」という語で「Leiden」についての知識を裏切る自分を眺めている。本当はありもしない英語の一方向性を敢えて鵜呑みにし、一方ではドイツ語の「Leiden」の多義性に戦っている。たやすくできてしまう裏切りだ。

しかしウィーンにいたとしたらどうなるだろう。私の部屋の窓の前の難民が住む家は取り壊され、土地は空いたままだ、時折私はこの住居の蔵書や、夢で知っているもの、たいていは食べ物だが、ここにはない色々なものが恋しくなる。ただ私がそこに帰った時、着いてみると、そういったものは決して、私の想像力がここでそう主張するほど美味しくないのだ。私は以前そうだったよりもそれらを美味しくしてしまうのだ、そしてこれが理由なのだ。つまり、ここに来て以来私は別のものに慣れてしまっていて、ウィーンに帰っても、以前の味覚の中にはもう入り込むことができない、だから慣れ親しんだものを期待する気持ちに裏切られるのだ。長い不在の後では刺激

抑制機能がもはや十分には働かず、全く知りたいとは思わないあらゆるもの、再び感じたいとは思わないものがすべて、なだれ込んで来るのだ。それは記憶の中に押し込められていて、今やその美しいイメージが躍り出るのだ。イメージの中のゼンメル丸パンは口の中でぼろぼろと味気なく崩れ、イメージの中の公園は老女と鳩によってもはや輝きを失っている、そして私は大急ぎで引っ込むのだ。ことば！テンポ！人と人の距離！二三日してようやく私に微笑みが戻り、町は再び扱い易いものになっている、大まかに言ってだが。細かいところでは私はもはや慣れ親しんだところにいるわけではないしそれを望むこともない、つまり、それには時間がかかりすぎるのだ。しかたなく私は自分の存在をごまかし、別の自分を差し出す、日々の生活のために。

亡命—『苦悩』のみが残り、『故郷』は遙か

ユダヤ人難民にとってニューヨークは安全な滞在地ではあったが、それが故郷になることは稀だった、なぜなら、彼らは失われた故国の記憶を忘れることができなかったからである。その上彼らはニューヨークで常に歓迎されたわけではない。「移民の町とは、地元民が移民たちを腕の長さの分だけ体から遠ざけておくことを心得ている町である」と、ルート・クリューガーが難民の出発点の状況を簡潔に説明している。

ことばの問題 経済的困窮と自分の職業の続行ができないことに加えて、異国のことばが、とりわけ作家や知識人、役者にとって特別な問題となった。マーシャ・カレコがこの転換の困難さのある詩の中で皮肉をこめて叙述している。「我々のような者がゼ・レングヴィッチ se lengvitsch（このことば＝英語のこと：訳者）を話すとき/それは綱渡りのようなものだ/文の構造はぐらつき、文法はびっこをひく/たとえばティ・エーチ ti-ehsch(th) がうまくできるようなことがあれば/それはお祝いをする理由になる」。

マーシャ・カレコは、はじめから亡命者の子どもとして、ロシア人の父とオーストリア人の母の間にガリチアで生まれたが、その詩作品によってベルリンでようやく名をあげたばかりの頃に、その著書は早くも禁書とされ焚書にかけられてしまった。そのあと彼女はニューヨークに逃亡し、とりわけ彼女の息子のために、典型的な亡命者地区に居を構えることを避けたにもかかわらず、異国への同化はままたらなかった。英語は彼女の詩作品の中でところどころ欠片として、たいていはドイツ語の表現との比較の中で現われるだけである。故郷のことばは、他の多くの亡命者にとってと同様、彼女にとって唯一の古里となり、適応の試みはことごとく喪失の痛みを背負わされていた、このことをカレコは「小さな違い」という詩の中で簡潔に要約している。「グッドウィル氏 Mr.Goodwill（善意の人、の意味がある：訳者）に/あるドイツからの亡命者が言った/〈確かに同じだ、/私が Land の代りに land と言い、/ Heimat のつもりで homeland と言い/また Gedicht の代りに poem と言っても、/確かに、私はとても happy だ：/だけでも glücklich

かというところではない)」。

しかし女優で歌手のロッテ・レニャは、ニューヨークで第二の成功をおさめることができ、自分の拙い英語の欠点を自ら意識してプラスに変えてみせた。「だってアメリカでは誰も本当に英語をしゃべってなんかいない、だからもともと訛りはそんなに目立たない。それに舞台の上では、少しばかり訛りのある方がアメリカ人には魅力的に聞こえるくらいだから」。

適応の問題 しかしながらことばだけでなく、見知らぬ環境、文化的な相違とアメリカ流の付き合い方もまた、新参者には苦労のもととなる。到着直後はマンハッタンのスカイライン（高層建築群の上に覗く空：訳者）が威圧的に感じられ描写される。摩天楼は暗くて否定的なメタファーとなり、通りは人間の残酷さに満ちているように見える、例えばローゼ・アウスレンダーの詩「クレーン」のように。「盲目のネオンの眼で/お前をブロードウェイが見つめている/二人の使徒が/福音をわめき散らす/音もなくクレーンが/教会を蝶番から外す」

最初の頃の圧迫感と並んでももちろん、ようやくナチの迫害からの安全を保障してくれた環境に対する感謝の念もしばしば現われる。マーシャ・カレコが言っているような初期の気持ちの高揚である。「最初の数年間、私たちとこの町との関係は新婚はやほやの男と愛する花嫁のようなものだった。すべてが新しく美しく、それゆえに（ただそれだけの理由でのことが多かった）魅惑的だった。」

成功した女流作家 成功した女性作家のヴィッキィ・バウムは、彼女のアメリカの出版者であり代理人、また作家仲間でもあるシンクレアー・ルースに迎えられて、まだ移住は全く考えていなかった彼女の最初の滞在では、「かつて見たこともないニューヨークという舞台」を楽しんだ。あるドイツレストランに入ったときのことを彼女は皮肉をこめて書いている。「レストラン・ルンペルマイヤーに入ったとき私は最初、シェンブルン動物園（ウィーンにある：訳者）のオウムの檻に入り込んだような感じがした。ルンペルマイヤーは女たちもしくは淑女たち—金と閑暇が女を淑女に変えるとしてのことだが—の排他的な社交場だった。店中に甲高くて騒々しいオウムの鳴き声とけばけばしい色で溢れていた」。彼女の自叙伝『すべてが全く違っていった』の中では、アメリカの女性に対する彼女の論評は酷評に近いものになる。美的感覚の違いにヴィッキィ・バウムは最初から苦労したようだ。彼女のヨーロッパ的刻印を受けた洗練の感覚はニューヨークでは違う受け止め方をされた。彼女の到着を報じる新聞はバウムの姿を、「典型的なドイツの主婦」と描写したと伝えられる。「地味な色合いで、大きな足に底の平らな靴を履いている」、これに対してニューヨークの淑女はカラフルで高いヒールが好みだった。ヴィッキィ・バウムは飲み込みが早く、とりわけメイクの女性に濃い眉を細い弓形に刈りそろえてもらうことによって、自分の容貌をアメリカ風に変えた。バウムがたいへん苦労したのは、大量のアルコール摂取と、

パーティなどで普通に行なわれ、服装の決まりごとや結婚生活の問題に関する会話に自分を追いやってしまう、男と女の仕切り分けだった。

女性哲学者 自分の職業をもはや続けることができなかった他の多くの難民よりもはるかに恵まれた地位に、いくらか苦勞した後到達したのが、哲学者ハンナ・アーレントである。アーレントは夫のハインリヒ・ブリュヒャーとともに1941年にニューヨークに渡り、50年代以降ウエストサイドのリヴァーサイド・ドライブ370、他のドイツ語系難民たちの近くで暮らした。生活費を切り詰めるため又貸しの下宿人まで置いていたアーレントの薄暗い住居からは、クラクフピアノ工場の看板と当時は酷い状態にあった公園が見えた。この女性哲学者は、アウフバウ誌 (Aufbau) と雑誌ユダヤ社会学報 (Jewish Social Studies) に原稿を書き、講師として社会研究新学校 (New School for Social Research) で教えていた。ニューヨーカー誌の依頼で彼女はアドルフ・アイヒマン裁判傍聴のためイスラエルに渡った。彼女のレポート「イエルサレムのアイヒマン」は知識人の間でセンセーションを呼んだ。アイヒマンという現象を説明するため彼女が発見した「悪の陳腐さ」という概念はその後、一般的な語法に取り入れられることになった。この哲学者がこの時代の多くのアメリカの作家に影響を与えた理由はこれだけではない。ニューヨーク・タイムズの編集者アナトール・ブローヤードは、ドイツからの亡命者の存在がニューヨークの精神生活に与える影響を次のように描写している。「私たちはドイツの教授たちに感嘆した。私たちはファシズムに対する戦いに勝利したのだが、今度は彼らの力を借りて文化と人間の心に潜む闇の力のすべてに打ち勝つのだ」。60年代にハンナ・アーレントの近くに住んでいたウーヴェ・ヨーンゾンとは彼女と親交を結び、彼女を自分の小説『記念日』のアドバイザーとして迎え入れることまで考えていたという。

フィーアテル一家 ハンナ・アーレントの近く、84番通り西346には、1942年にベルトルト・フィーアテルがアパートを借りた。この作家は30年代、パラマウント映画との台本契約のために家族を伴って当初3年間の予定で、ハリウッドにやって来たのだ。後にとりわけ彼の妻ザルカが台本作者として映画業界で成功し、一方ベルトルトは作家の仕事と芝居の演出の方に集中していた。この作家はしばらくニューヨークに暮らすということを何度も繰り返し、そこで彼は1945年にブレヒトの「第三帝国の恐怖と悲惨」を演出したが、残念ながら成功とは言えなかった。ザルカ・フィーアテルは本来女優だったが、家計と3人の息子の養育費をやりくりし時には夫ベルトルトを支える役回りであったため、生活の必要と偶然から英語で執筆するシナリオライターになった。

ザルカ・フィーアテルの場合と同じく、家族を養っていたのはドイツからの知識人層難民の女性であることが多かったが、それは彼女たちがどうやら、自らのステイタス以下の仕事をするこ

とにあまりとまどいを見せず、外国語で活動することをほとんど厭わなかったからであろう。それを示す例としてベルトトルトの二番目の妻であるエリーザベト・ノイマン＝フィーアテルは、医師の助手としての彼女の生存をかけた日々を次のことばで語っている。「白衣を着ているとき私は、役を演じているのだと思うことにしていた」。

マン姉弟 ドイツ人亡命者にとっての重要な関連人物が、エーリカとクラウスのマン姉弟だった。エーリカはミッドタウンのグランドセントラル駅近くの42番通り東122にあるチェイン・ビルに、1936年にはもう自分の劇場「胡椒引き Pfeffermühle」を開設していたが、そこではシャンソンと寸劇がドイツ語と英語翻訳で上演された。もっとも客の入りはほどほどだったと、弟のクラウスが回想している。この姉弟は他の多くの難民と同様、40番通り東118のホテル・ベッドフォードに住んでいたが、ここで二人はドイツからの亡命に関する委託作品を執筆していた。「ホテル・ベッドフォードは、町の真ん中に位置している。商店でにぎわうレキシントン・アヴェニューとファッショナブルなパーク・アヴェニューにはさまれた、比較的静かな40番通りは、運命を共にする人々でひしめいていて、昔のチューリヒやパリのどこそこのカフェのようだった。

(…)我々が『生への脱出 Escape to Life』で描いている人物の輪は常に拡大している。オーストリアから後発隊が来るという。誰もが自分なりの恐ろしい物語を持って来るのだった」。

アウフバウ誌 オスカー・マリーア・グラーフ、ネリ・ザックス、トーマス・マン、リオン・フォイヒトヴァンガー、フランツ・ヴェルフエル、マーシャ・カレコ、アレクサンダー・グラナーハ、ハンス・ザール、アルフレート・ポルガーといった、多くのドイツ語で書き続ける亡命作家たちは、少なくとも週刊誌アウフバウに発表の場を持っていたが、この週刊誌は1934年に初めて、「ニューヨーク・ドイツユダヤ人クラブの広報誌」として刊行されたものだった。この誌は文学の出版機構としての役割を果たしていたばかりではなく、日々の様々な問題についての支援を果たそうともしていた。戦後、ほとんどの移民が異国での生活に適応した後、アウフバウは友人や親類たちの搜索を容易にするために強制収容所の犠牲者と生存者に関する情報を公開した。今日ではアウフバウ誌は読者数の減少のために一ドイツ系ユダヤ人の亡命者一世はもはやほとんどこの世を去り、その子供たちは大部分が同化している一隔週でしか刊行されていない。2002年5月にこの誌は、サブタイトルに「大西洋横断のユダヤ誌 (Transatlantic Jewish Paper)」を掲げ、根本的な刷新を行なった。半数は英語、半数はドイツ語で執筆される記事では、政治、ユダヤ人の生活、ユダヤの歴史、文化及びアメリカにおけるドイツ＝ユダヤの遺産が紹介されることになっている。継続して行なわれるドイツとアメリカの関係に関する議論のためにも、インターネットでも閲覧可能なこの雑誌は一読に値する。

嫌疑を呼ぶ共感 出版業者のヴィーラント・ヘルツフェルデは、そのニューヨーク滞在の初

期、ドキュメンタリー映画の編集者兼シナリオ作家として活動しており、彼の妻は子守女とドーナツ店の従業員だったが、ヴィーラントがついにはブロードウェイ23番通りのフラティロン・ビル¹の向いに絵葉書店を構え、この店を彼は「七つの海の本と切手の店」(*Seven Seas Book & Stamps Store*)と名付けて、書店としても使おうとした。エルンスト・ブロッホ、ベルトルト・ブレヒト、フェルディナント・ブルックナー、アルフレート・デーブリン、リオン・フォイヒトヴァンガー、オスカー・マリーア・グラーフ、ハインリヒ・マン、ベルトホルト・フィーアテルといったオーストリア及びドイツの作家たちと協力して、ヘルツフェルデはこの直後亡命作家の出版社オーロラ(*Aurora*)を設立した。書店は事務所として使われたが、この作家たちは左翼思想に共感を抱く外国人として、反共体制にとって不審人物であったため、常にFBI情報部員の監視がついていた。この出版社が1949年、ニューヨークを去って東ベルリンに向ったとき、ヴィーラントの息子は、出版業の代りに今や靴修理店が開店したと、痛みをこめて語っている。「FBIの書類と、数十年後に私が見ることのできた^{シュタージ}Stasi(秘密警察のような東ドイツ国家保安部の組織：訳者)の書類の中でだけ、「七つの海の本と切手の店」は永遠の命を得た。アメリカの国家保安部も共産主義体制の国家保安部も(もっとも後者は後から振り返ってのことだが)、我々がこの書店で生計を立てることができていたなどということは疑問視していた、それゆえに、この店がそれぞれの〈敵〉にとって初動機関の役割を果たしていたに違いないという疑念を抱いたのだ」。

亡命地図 ニューヨークにおけるドイツ亡命者の最も重要な記録者の一人として、1941年にニューヨークにやって来た作家のハンス・ザール²の名を挙げなければならない。「私はリヴァーサイドドライブにある家具付きの部屋に住んでいたが、そこには私のベッドの他に椅子が一つとテーブルが一つ置かれていた。食事はアルコールランプの上で作った。私の窓からはハドソン川に浮かぶ曳航されるはしけと島を一周する鈍重な観光汽船、それに沿岸警備のモーターボートが見えた。夜になると私たちは角のドラッグストアに集まり、(新しい世界)に関する経験を交換しあった。チャップリンの『独裁者』は期待はずれだったとか、あるユダヤ人委員会が日当を払ってくれるだとか、だれそれが大学にドイツ語教師の職を得て、学生たちが自分の拙い英語に文句を言わないことを不思議がっているだとか」。

ハンス・ザールは戦時中すぐに、押収されたドイツ語の文書をアメリカ空軍のために翻訳する職を得た。彼の回想録『亡命の中の亡命生活』の中で、ザールはニューヨークにおけるドイツ人の集合場所を基にして地図を描いているが、それはドイツ人難民のためのちょっとしたウェストサイドのタウンガイドのように読めるものだった。ザールが特に取り上げているのは、ドイツ語のウムラウトをアメリカ製のタイプライターに組み込む注文ができる、アムステルダム・アヴェニューにあるタイプライター店チャールズ・オスナーと、ユダヤ教区がハンナ・アーレントとジ

ークフリート・クラカウアーに別れを告げたウェストサイド葬儀会館である。一方、マックス・ラインハルトとイゴール・ストラヴィンスキーのような本当に成功した亡命者たちの葬儀は、アップパー・イーストサイドで行なわれた。亡命の研究者に対してハンス・ザールが薦めているのはリヴァーサイド・ドライブの調査で、「72番通り西と100番通りの間、そこで私たちは夜、対岸にニュージャージーの灯りがともった頃に集まった。(…)ここでハンナ・アーレントが悪の陳腐さについて書き、ヘルマン・ブロッホが彼の『ヴェルギリウスの死』を書き上げたのだ。ここでカール・アウグスト・ヴィットフォークが、ノルベルト・ミュレン、ハインツ・ペヒター、オットー・フェーデル、ヘルマン・ボルヒャルトが疑念を抱き、さらには絶望したのだ」。演劇作者ソーントン・ワイルダーのための翻訳作業を通じて、国外移住したヨーロッパ人であるハンス・ザールと、ベルリンで暮らしたことがあるアメリカ人の作家との間に、緊密な協力関係が生まれた。協力して二人は、国民性と性格、気質の違いを浮き彫りにしようとし、注目すべき成果に到達したが、それは現在でもなお有効性を失っていない。ハンス・ザールはそれを、もう一人のヨーロッパ的刻印を受けたアメリカ女性であるガートルード・スタインの名文句に託して短評している。「アメリカ人にとって量とは1プラス1プラス1である。ヨーロッパ人にとってそれは、250であつたり6789であつたりする」。

50年代半ばにハンス・ザールはウェストエンド・アヴェニュー800のアパートに引っ越したが、彼はこのビルの屋上での散歩を試みた。というのも、そこはヨーロッパにより近いからであり、そこで彼はある意味で全体を見渡しながらいドイツの亡命の歴史を概観することができるからである。「ここで、最初のピルグリムたちがアメリカに渡った同じ名前の船に倣って名付けられたホテル・メイフラワーで、……ここでエルンスト・トラウがドアノブに掛けた紐で首を吊った……そしてそこで、ハドソン川を上ったところのヨンカーズで、エルヴィン・ピスカートルと彼の美しい妻がヨーロッパから逃れてきた名士たちをもてなしたのだー例えばフェルナン・レジェ、ヴァルター・グローピウス、ミース・ファン・デル・ローエ……忘れてならないのはカーネギーホールで、そこではブラームスの2番と〈大地の歌〉との間の休憩時間に、20年代のベルリンフィルで以上にドイツ語が話された。(…)アメリカはヒットラーへの抵抗から文化国家になり、ニューヨークはその中心都市となった。今やアメリカは再びアメリカ人のものだ」。古い世代の亡命者がどんどん死んで行くようになって、1989年にハンス・ザールはドイツに帰還した。

亡霊たち ニューヨークでの耐えられない亡命生活からの唯一の逃げ道としての死について書いているのが、ヒルデ・シュピールの小説『リザの部屋』である。主人公のリザはホームシックのあまりリヴァーサイドドライブ76にある彼女の部屋からほとんど出ないで、そこで昔の良かった時代の記憶の中から自分の世界を造り上げる。亡命者たちは午後を、そこではすべてが昔と同じように見えるカフェ・モーツァルトで過ごすことを好む。「ウェイターはピアニストのような

髪型で、勘定を求めるとすぐにとんで来る、コーヒーは故郷と同じ味がし生クリームもつけられた、ドーボストルテも、ウィーン式レシピのサッハートルテもあった。その向うに町の景観が姿を消すプリーツのある綿紗のカーテンの下でしばらく座っていると、客はまるで時間が10～15年も逆戻りして、外には路面電車がチンチンと走り、彼らの愛する町のモルタルの家が立っているかのような錯覚に身をまかせるのだった」。オーストリア人のヒルデ・シュピールはナチスの時代をロンドンで過ごしたが、『リザの部屋』では40年代の亡命者の境遇を、すぐにもニューヨークでの新生活に適応する覚悟のできている若い東欧移民の女性の視点から描いている。ノスタルジーにかられた麻薬中毒の亡命女性の小間使いとして彼女は、古きヨーロッパの退^{デカダンス}廃を表現する役回りなのだ。この若い移民女性にとってはマンハッタン^{マンハッタン}の空は無限であるが、年配の亡命者たちはこれに反し「亡霊でありアウトサイダー、過去に囚われた者たち」である。リザの死後、彼女は（死んだ）女主人のアメリカ人の夫と結婚し、ヨーロッパの悪夢は葬られる。

ドイツ系ユダヤの残滓 作家のゾーマ・モルゲンシュテルンはニューヨークでのホテル生活をおくっていたが、彼について、生涯を共にした友人のヨーゼフ・ロートが次のように言っている。「ゾーマはすべてのものに自分なりのユダヤ流解釈を施した。ゾーマは彼のルーツを身にまとして、靴の中に入れていた。ゾーマの身には何ごととも起こり得ないのだった」。このことばに従えば、ゾーマ・モルゲンシュテルンはニューヨークでウィーンの友人たちとのコンタクトはあったにしても、新しい町で亡命者の仲間内だけの活動をしていたのではなさそうである。ユダヤ人の共同体の中にいられる限り、彼はニューヨークを故郷のように感じていた。アップパー・ウェストサイドのいくつもの居酒屋で、また、アップパー・イーストサイドのドイツ人地区ヨークヴィルで、それは十分可能であった。しかし今日では、ドイツ系ユダヤ人の生活の痕跡でさえ、セントラルパークの両側では町の景観から消えてしまっている。

マリー・ローゼンベルクは1939年にブロードウェイ1841にある彼女の居間で書店を始め、そこがトーマス・マン、リオン・フォイトヴァンガーやフランツ・ヴェルフエルなどのドイツ人亡命者たちにとって重要な活動開始の場の一つとなった。それは後には、作者のサインが見つかることさえあるドイツ語書籍の第一版の蒐集家たちにとっての、とっておきのヒントになった。今日ではセントラルパークを一望することができる高価なマンション群が林立する喧噪に満ちたコロンブス・サークルでは、終いには家賃が高くなりすぎて書店を維持することができなくなった。それ以降ドイツ語書籍はニューヨークでは、今では世を去ったマリー・ローゼンベルクの共同経営者の一人に電話で注文することしかできなくなった。

72番通り西141にあるウィーンのカフェの雰囲気をつたえた有名なカフェ・エクレアは1995年に閉鎖された。今日そこにあるのはドーナツのチェーン店クリスピー・クレームの店であり、上の階にはアメリカ軍への入隊募集事務所が入っている。ヴォルフガング・ケッペンが1959年に訪

れた時なお憤激する余地のあった―「68番通りはドイツの悪夢だった」―、ニューヨークで目立つドイツ（人）の存在は、今日では消えてしまった。

「**第四帝国**」 1938年にニューヨークにやって来て亡命者世界を統合する人物と目されていたオスカー・マリア・グラーフも、その小説『ほどほどの世界への逃亡』において、異なる世界の経験を作品化している。異なる言語と文化のはざまでの生活は亡命者の非帰属性（アウトサイダー的存在）を強め、彼はこの中間的状況に留まって自分をそれ以上発展させることができない。ニューヨークは彼に休む閑を与えてくれない。「個々のものは常に失われる、全体だけが私を繰り返し捉えるのだ。故郷の暮らしとは間違いなく何の関係もない、故郷の暮らしには特定の親密さが必要だ。ここではそれが全く欠けている。ここでは私は、巨大ホテルのどうでもいいグループ客のような気がする」。

英語に熱心になれなかったグラーフは初めのうち、生活費を稼いでいた妻のミーリアムにアメリカのショートストーリーをドイツ語で朗読させていた。二番目の妻ギーゼラとは、マンハッタン北部のワシントンハイツという地区のヒルサイドアヴェニューとブロードウェイで暮らしたが、そこは当時ドイツ人人口の割合が高かったため、冗談交じりに「第四帝国」と呼ばれた。1967年のオスカー・マリア・グラーフの死後、ギーゼラ・グラーフは彼の部屋をそのままに残した。「夫の母親の写真、トルストイとバイエルン国王ルートヴィヒⅡ世の肖像画；(…) 小さな文机は窓の隣にあり、窓からは（ここで）高架になっている地下鉄の軌道と何本かの木が見渡せた。ここでグラーフは彼の作品を書いたのです」。これに対して外の世界は非常に大きく変化した、ワシントンハイツは今では全くのヒスパニック地区である。オーストリアの女流詩人でエッセイスト兼編集者でもあるミーミ・グロースベルクは、1997年の彼女の死までこの地区でメキシコ人、プエルトリコ人及びドミニカ共和国からの移民たちの間で暮らした。彼女はもはやニューヨークを離れようとしなかった、この町では彼女の保存された記憶がまだ実体を持っていたので、今では彼女にとってウィーン女性でいることができる唯一の場所に思えたのである。これに対して実際のウィーンでは、殺害された彼女の家族の思い出に苛まれて、彼女はもはや故郷だと感じることはできなかったのである。しかしニューヨークでは彼女の望郷の念の力がコカコーラをワインに変え、デパートのウールワースをウィーンでそれに匹敵するヘルツマンスキイに変え、イーストサイドをフランツ・ヨーゼフ=河岸に変え、グランドセントラル駅をウィーン西駅に変えてくれるのだった。故国で婦人帽製造の技術を学んでいたミーミ・グロースベルクは、帽子職人として生計を立て、ニューヨークの亡命者の世界で活動し、詩人のウルツィディール夫妻や、フリーデリケ・ツヴァイク、ギーナ・カウスと親交を結び、講演を行ったりオーストリア出身の亡命作家たちのアンソロジーを編集した。

そのままの形ではもはやどこにも、新しい生活の中心にも故国にも存在しない言語にこだわり

を持つという、亡命文学のパラドックスを、ハンス・ザールがその回顧録で的確に描写している。つまりそれは、失望した者のための失望した者による文学であり、彼らはかつて情熱に満ちていて、今はもうなぜそうなれないのか考えることをやめられない者たちだ、というのである。

異なる文化のはざま 新しい環境と言語への統合が最もうまくいったのは、非常に若くして故国を離れた人々である。1931年生まれのリート・クリューガーは強制収容所からの解放後初めてニューヨークに渡り、そこで早期亡命者たちの適応が進んだ現状と対面することになった。「皆が私たちに、自分がどれだけアメリカ化されたかを見せようとした。彼らは英語を話すとき互いに間違いを指摘し合い、嘲笑し合った。そして自分たちが土地の人間（アメリカ人：訳者）とは見なされていないからと言って、自らを蔑むのだった」。慇懃無礼な扱いを受け、学歴を手に入れるのにも苦労したが、リート・クリューガーはニューヨークの女子短大を卒業しバークレー大学の入学許可を手に入れることに成功した。1929年生まれの女性作家ローレ・ゼーガルは、児童の移送という回り道を経て一子ども時代を彼女はイギリスのいくつもの受け入れ家庭で過ごしたのだった—ニューヨークにやって来た。自分の帰属意識を尋ねられるとゼーガルは今日、意識して多義的な答え方をする。「私は自分が、イギリスで学校に通いアメリカで暮らしているオーストリアのユダヤ人だと感じます。それはわかります、と人々は言いました、でも本当は何人だと思っているのですか。私は言いました、イギリスで学校に通いアメリカで暮らしているオーストリアのユダヤ人です。日常の自分においても作家としての自分においても、私は自分が、私を特徴づけるすべての成分から構成されていることを望んだのです」。

長編『彼女の最初のアメリカ人』でゼーガルは、オーストリア・ユダヤ人女性イルカ・ヴァイスニクスのニューヨーク到着と、亡命者仲間の世界の閉鎖性から逃れようとする彼女の試みを描いている。イルカは彼女の従姉の住まいに引っ越すが、この従姉は、両親の同化によって失われたと思い込んでいる自分のユダヤ的伝統に近づこうとする試みの真っ最中なのだ。若いイルカは自分のオーストリアの記憶をニューヨークの上に重ねようとするのだが、そうすることで、安っぽいネオンの光に彩られた有名なタイムズ・スクウェアを見てもとりわけ印象を受けることなく、とりわけウィーンのクリスマスの市を思い出すのである。

偶然彼女は黒人作家のカーター・バューに出会って彼に恋をし、彼がこれ以降、アメリカを—彼の視点から、ただし飲酒と憂鬱によって曇らされたイメージだが—彼女に近づけるのである。しばらく後にイルカはホロコーストを逃れてきた母親に再会するが、しかし母親は一病気の父親を棄てそれによって死に委ねてきたために一悪夢に苛まれている。二人で借りたアパートはワシントンハイツにある。「この建物に住んでいるのは、他のオーストリア人とドイツ人、チェコ人ばかりだ。ヒットラー以前には、ブロードウェイ角のポーランド人の肉屋がウィーンの私たちの通りに住んでいた。私の英語の先生はブダペスト出身のペディキュア師だ」。

だんだんと母親は家に閉じこもるようになり、妄想は彼女にとって現実となる、一方イルカは外で過ごす時間が多くなる。彼女は、今、ここで、生活したいのであり、過去の中に生きたいわけではない。母親の罪の意識を振り払うため、二人の亡命者はもう一度ウィーンに、つまり彼らのルーツの地に戻るが、そこではもちろんすべてがすっかり変っていて、昔住んでいた家も他の人間に引き継がれている。「記憶というのは複雑なものだ。しばしば事実だとされる物の大きさの変化も、つまりは見る人の身体の変化しているからなのだが、その最も単純な現象だ。さらにその上、記憶がそれでできている幻みたい透明で消えやすい材質と、実際にしばしば変化している、しかしまた変化していないことも多い、輪郭の鮮明な実質を伴った物体との間の衝突も計算に入れなければならない：〈シュムツキのキャンディー屋で今は靴を売っている〉と、イルカの母親は窓から外を覗いて言った。〈売り台は今も同じものだけど、あの人たちはそれを反対側に置いている〉」。

母親は、過去への旅でよく見知った場所を再び見つけることに失敗した後、自分の記憶を訂正しそうすることで罪の意識を振り払うことができた。そしてイルカはアメリカの国籍まで取るのである。その際の証人は黒人の女友達とユダヤ人の従姉で、そのことによっていま一度、ゼーガルの長編を貫いている二つのマイノリティの相違と類似点、相互に抱き合うルサンチマンが表現されるのである。

イルカの黒人の恋人の死後、物語は救いのある結末を迎える。カーター・バユーの追悼会でイルカは、彼女が最初は拒絶していたバユーの黒人の学生たちに、カーターが見つけた彼女の名前の解釈を打ち明ける。「私はカーターに、ヴァイスニクスという名前は〈知らない〉という意味だと説明しました。でもカーターが言うには、それは〈白じゃない〉っていう意味なんですって、だって私はユダヤ人だから」。かつて二人に向けられた軽蔑の思い出は、もしかしたらこの二つのマイノリティの間の対話の可能性を与えてくれるかも知れない。二つのことばの中で生き書くローレ・ゼーゲルは、その仕事を通じて、なかでもグリムの昔話を英語に翻訳しているが、ドイツ文化とアメリカ文化の仲介者になったのである。

もっとも現在ワシントン・ハイツでは、主にスペイン語が話されている、そして家賃が9・11以降、中心地からの流入が始まったとき、目に見えて上昇しているために、昔から住みついている人たちの多くは新しい住まいを探さざるを得なくなっている。